文化論集第25号
2004年 9 月

クライストの『決闘』

――その関連作品について――

猪 股 正 廣

ハインリヒ・フォン・クライスト Heinrich von Kleist が残した８篇の物語 Erzählungen のうち，『ミヒャエル・コールハース』，『Ｏ侯爵夫人』，『チリの地震』の３作品は，1810年に出版された『物語集』第１巻に，『聖ドミンゴ島の婚約』，『ロカルノの女乞食』，『拾い子』，『聖ツェツィーリエ』，『決闘』の５作品は1811年に出版された『物語集』第２巻に，ここに記した順序で収録されている。『拾い子』と『決闘』は『物語集』以外に発表されたことがなく，異稿を持たないが，他の作品は全体あるいは一部が当時の新聞や雑誌に発表された後に，『物語集』に収録されており，それらの異稿を含めた全体がクライストの短編作品のテクストということになる。このうち，劇作家でもあるクライストの演劇的構成及び舞台のイメージがもっとも濃厚な作品は，少なくとも『物語集』第２巻に限って言えば，その冒頭と掉尾を飾る『聖ドミンゴ島の婚約』と『決闘』であると私には思われる。『聖ドミンゴ島の婚約』はクライストの死の翌年である1812年にテオドール・ケルナー Theodor Körner（1791－1813）によって『トーニ』という３幕劇に仕立て直されたことがあり，私は20年ほど前ではあるがそのことにも若干触れた文章を書いたことがあるので，今回は『決闘』を取り上げる。ここではこの物語と関連するいくつかの他の作品について論ずるが，作品のいわば内在的研究である物語構成及び文体的特徴については，別稿

（日本独文学会研究叢書）で扱う予定である。

『決闘』Der Zweikampf は発表当時，いわゆる伝統的騎士物語の亜流と受けとめられたようである。ヴィルヘルム・グリム Wilhelm Grimm（1786－1859）は，1811年10月10日の新聞 Zeitung für die elegante Welt に「数多くの騎士物語のひとつであるが，この作品の描写は重く，そして詰屈である」と書き，翌年９月28日の新聞 Leipziger Literaturzeitung にもこの作品を「騎士物語：決闘」として紹介している。2003年にドイツで出版されたクライストの伝記 Rudolf Loch: Kleist eine Biographie においても，この作品について「自由な作家でさえも市場に身売りするのを余儀なくされている。クライストはトロタという人物によって時代の趣味に迎合し，騎士物語の愛好者に奉仕したのである」と書かれている（S.397f.）。クライストは作家生活に入る前にヴュルツブルクに旅行（1800年８月－10月）した折，同地の市立図書館を訪れ，ヴィーラント，ゲーテ，シラーの本が一冊もなく，騎士物語 Rittergeschichten だけが書棚の左右に並んでいたと手紙（1800年９月14日付けヴィルヘルミーネ宛て）に記したこと（「右側の棚には幽霊の出る騎士物語，左側の棚には幽霊の出ない騎士物語」）があり，かつて騎士物語が一般の読書界にあって如何に興隆していたかがうかがえる。この騎士物語を，あえて騎士道物語 roman de chevalerie の概念を単純化して，ただ中世的騎士が登場する恋愛物語と定義してみよう。すると，クライストの劇作品では『シュロッフェンシュタイン家』と『ハイルブロンのケートヒェン』，物語では『拾い子』と『決闘』がそれに該当し，近代的な作家と見られているクライストも実はかなり当時の流行の影響を受けていたのではないかと推測することができる。

実際にクライストの『決闘』と関連すると考えられている典拠も，既に定評となっているものを含めてやはり騎士の登場する物語がほとんどである。その元の物語のジャンルを示せば 年代記 Chroniques であったり，物語 Historia で

あったり，悲劇 Tragödie であったり，長篇叙事詩 Epos であったりする。すなわち，ひとつはフロワサール Jean Froissar（1337－1410頃）の膨大な『年代記』からの，そしてひとつはセルバンテス（1547－1616）のビザンチン小説風『ペルシーレスとシヒスムンダの苦難――北辺物語 historia septentrional』からの，さらにひとつはゲーテ（1749－1832）の『ファウスト悲劇第１部』Faust. Der Tragödie erster Theil からの，もうひとつはタッソー（1544－1595）の長篇騎士物語詩『解放されたエルサレム』からの挿話である。これらの出典について今さら多言を弄するのは避けようと思うが，ただ私が啓発されたことに限って少し触れておきたい。

クライストは物語『決闘』を発表する前に，フロワサールのフランスに関する『年代記』の一挿話をもとにしたアネクドーテ『奇妙な決闘の話』Geschichte eines merkwürdigen Zweikampfs を1811年２月20日と21日のベルリン夕刊新聞に連載している。その前年にはベヒラー C. Baechler なる者が新聞 Gemeinnützige Unterhaltungsblätter にやはりそのドイツ語翻案 Hildegard von Carouge und Jacob der Graue を一括掲載している。ベヒラーの翻案では Jacob der Graue と戦う決闘の相手は Johann von Carouge であり，クライストのアネクドーテでは Hans Carouge であるが，ベヒラーの翻案と異なり，クライストのアネクドーテの中には主人公の夫人の名が記されていない。ベヒラーの標題に見られる Hildegard の Hilde の語源は「戦い」の意味，Gard は「保護」の意味であり，その翻案した内容にもふさわしいと思われる。ところがクライストはアネクドーテにおいては女主人公の名を特に挙げず，物語『決闘』においてはそれを Littegarde に変えた。その名の意味するところは，「文字または文学の保護」となったのである。『決闘』にちりばめられたこうした文筆に関わるメタファーについては，ロイスとシュラーのそれぞれの論考（Rohland Reuß: Mit gebrochen Worten 及び Marianne Schuller: Pfeil und Asche）に詳しいので，ご関心の向きは参照していただきたい。

次に，セルバンテスの『ペルシーレスとシヒスムンダの苦難』であるが，この作品では冒頭から唐突に登場する二人の主人公をめぐる数多くの冒険が次々と物語られる。しかし，その一貫したテーマとなっているのは男女の愛と信頼である。北方の異なる島国のそれぞれ王子，王女である標題の二人がわけあって名前と素性を隠し，ペリアンドロとアウリステラという兄妹だと身を偽り，途方もない艱難辛苦と波乱万丈の旅を続ける。全４巻の前半である第１巻と第２巻では，北欧の蛮国での遭難，捕縛，略奪，虐待，逃亡，救助といったダイナミックな試練にあって，また後半ではポルトガル，スペイン，フランスを経てローマに到着するまでの巡礼にあって，次々と見舞われる危機や誘惑に打ち勝って，堅い絆を守り抜く二人の姿が描かれている。前半の第２巻の末尾に置かれた，小島にひっそり暮らすフランス貴族レナートと宮女であったエウセピアの挿話もその愛と信頼というテーマによって主筋の弦と共振している。作品全体の大きなテーマの中では，レナートがかつて讒言者を相手に戦った決闘はほんの一事件に過ぎない。クライストの『決闘』は，その関係を逆にしたと言える。つまりクライストの作品にあって決闘は単なるエピソーデではなく，作品の中心的事件であり，二人の主人公の愛と信頼というテーマはまさにこの決闘に至る事件とその顛末をめぐるプロセスの全体を通して低く強く鳴り響くのである。フリードリッヒとリッテガルデの物語は最後に秘められた意外なエピソードに隈取られてロマン的な光芒を放つように構成されているが，これは『ペルシーレスとシヒスムンダの苦難』と対照的でありながら似た効果をあげている。クライストはフロワサールの『年代記』に見られる決闘のエピソードが夫婦間の貞操をめぐる事件であり，しかも夫が妻に信頼の保証を求める場面があるのを踏襲しなかった。信頼のテーマをより普遍化するために，ペルシーレスとシヒスムンダのように二人が結ばれるべくして未だ結ばれていない関係としながらも，しかし決闘を単なるエピソードにとどめず，主筋そのものとしてその中で信頼という難事を成就させたのである。

セルバンテス晩年のこの傑作を纏まったものとして初めてドイツ語に翻訳したのは，クライストの友人でもあるフランツ・テレミン Franz Theremin（1780－1846）であり，彼は1808年にその前半の第１巻と第２巻を合わせた翻訳を第１部 Erster Theil として出版したが，その第２部はついに出版されることがなかった。クライストはこの本が気に入ったらしく，自分の『物語集』第１巻も同じ装丁にするようにと手紙でライマー書肆に指示しているが，あのレナートの決闘のエピソードは，この褐色のマーブル紙で表装された分厚い本のちょうど最後の部分に位置している。そしてまた，フランツ・テレミンは，『物語集』第２巻の『決闘』の直前に置かれた『聖ツェツィーリエ』の成立にかかわるアダム・ミュラーの娘に，洗礼を施したプロテスタントの聖職者でもある。ミュラー自身はカトリックに改宗していたが，離婚歴のあった彼の妻がプロテスタントであり，彼女の娘はプロイセンの国法ではプロテスタントでなければならなかった。この事情をもってヴィトコヴスキーは『聖ツェツィーリエ』に込められたイロニーの原風景として，次のように書いている。

「この作品（聖ツェツィーリエ）は最初1810年のベルリン夕刊新聞に，アダム・ミュラーの娘である M. ツェツィーリエへの洗礼の贈り物として掲載された。ミュラーはドレースデン時代，クライストとともに刊行したフェーブスに彼のイロニー論の主要な章を発表していた。そのイロニーはこの洗礼そのものまでも及んでいるのだ！　ミュラーは５年前に改宗し，それから離婚歴のあるプロテスタントの女性と結婚し，今度は自分の娘にカトリックの聖人の洗礼名を与えるのであるが，自分の友人であるプロテスタントの牧師の手で，プロテスタント教会において，プロテスタント式にそれを行うのである。彼には勿論そうせざるを得ない理由があった。というのはプロイセンの国法では，娘は母親の宗教に属させられたからである。かくしてこの洗礼は『ベルリン・ロマン派の輝ける祝典』であるばかりでなく，確かに官僚主義の圧力下ではあったが，

ロマン主義的イロニーの活人画の如きデモンストレーションでもあったのだ」(Wolfgang Wittkowski: Die heilige Cäcilie und der Zweikampf. Kleists Legenden und die romantische Ironie. In: Colloquia Germanica 6. 1972 S.30)

フランツ・テレミンはアダム・ミュラーともども，クライストが心中したヘンリエッテ・フォーゲル夫人のかつての情人の一人であったと当時噂されていた人物でもある。貞操と信頼をめぐる『決闘』のテーマに作家をめぐるこうした周辺的な人間関係がどう作用しているのか，あまり詳らかではないがクライストの伝記上からも気になる皮肉な事情ではある。

1808年に刊行されたゲーテの『ファウスト悲劇第１部』との関連については，特にグレートヒェンの牢獄場面とリッテガルデの牢獄場面との類似がモムゼン Katharina Mommsen の著作 Kleists Kampf mit Goethe の中で明らかにされた（S.150f.）が，その場面以外でもクライストは『ファウスト』の意識的なパロディーを試みたと考えることができる。モムゼンによれば，フリードリヒ・フォン・トロタとはすなわちクライストであり，ヤコプ赤髭伯とはすなわちゲーテであって，クライストは喜劇『壊れ甕』の上演によって一時的に失敗し，ゲーテに敗北したかに見えても，後に復活し最後には勝利するという夢をこの作品に託したのだとされる（S.138f.）。とすればもう一歩進めて，ヤコプ伯はすなわちファウストでもありうるだろう。ファウストがグレートヒェンに子を孕ませて彼女を死に追いやったように，ヤコプ伯はリッテガルデと思い込んだ侍女ロザリエを孕ませ，その生まれた私生児によって己が破滅の道をたどることになる。グレートヒェンは生まれた私生児を川に流すことによって狂気に陥るが，ロザリエと両親は生まれた子を裁判所に届け出てヤコプの錯覚と犯罪を明るみに出し，その結果，処刑寸前のフリードリヒとリッテガルデを救い出すのである。

ところで，この『ファウスト』との関連もさることながら，私はモムゼンの

著作の中でもうひとつ別の指摘にも蒙を啓かれる思いであった。それは決闘に臨んだフリードリッヒの拍車について論じた部分である。最初から騎馬によらず地上で行われた闘争であったのに，なぜ主人公は足に拍車を帯びていたのか。モムゼンはクライストがワイマールでのゲーテ演出による『壊れ甕』上演の失敗後，1808年３月11日の新聞 Allgemeine Deutsche Theater-Zeitung に載った，それを揶揄する劇評記事（ゼムトナー Helmut Sembdner が後に発掘した資料 Lbs.Nr.247）を読んだのだとしている。

「作者が劇作家ではない証拠は，彼が演劇のあらゆる規則に対して無知であることである。クライストだとかいう紳士だと聞いているが，この勇敢な大佐殿は（どうしても作者は軍人であるように思われるので），喜劇役者用の靴を履いたはいいが，拍車を外さなかったために，喜劇の女神ターリアのガウンを纏って縺れてしまった。そうやって何時間もあちこち引き摺っていたが，とうとうたまらずその軽薄な装いを身ぐるみ脱ぐ始末」（S.140）

クライストは『壊れ甕』の初演失敗がゲーテの演出にあるばかりではなく，自分の原作の罪でもあると認めて後に改作を施したが，「この拍車に縺れて」という表現を記憶していて，それをフリードリヒが決闘で躓く場面に使い，しかも主人公が同じようにつまらない失策を作品の中で自認する趣向にしたのであり，また，フリードリヒが長引く戦いに不平を漏らした観客に反応して戦法を変えたことについても，初演の『壊れ甕』がやはり観客を十分に退屈させるような長い劇であったと，そうモムゼンは指摘しているのである。

さて次に，イタリアルネッサンス，あるいはバロックの代表的詩人であるタッソーの『解放されたエルサレム』についてであるが，この作品とクライスト作品との関連を論じたのはブライク Friedrich Braig である。この長篇叙事詩には第１回十字軍の遠征を背景として多くの騎士が登場するが，英雄リナルド

Rinaldo と異教徒の魔女アルミーデ Armide，また騎士タンクレート Tancred と異教徒の女勇士クロリンデ Clorinde の恋と戦いの物語が名高く，後世においてマドリガルやオペラや交響詩などの音楽の題材にもなった。とりわけタンクレートとクロリンデの奇妙な戦闘場面がクライストの悲劇『ペンテジレア』を思わせるばかりでなく，全20歌のうち第２歌に描かれた，ひとつの劇的なエピソードが『決闘』の結末部分での主人公たちの救済を「遠くから告げている」とブライクは述べている（Friedrch Braig: Heinrich von Kleist 1925 S.475）。そこでは，エルサレムの少数派キリスト教徒である娘ソフロニアと彼女の恋人のオリンドが，聖母マリアの絵を異教徒の寺院から奪い返し燃やしたと相次いで名乗り出たため，サラセンの王アラディンの命によって火焙りの刑に処せられようとした時，ちょうど折しもペルシャの戦場から帰ってきたクロリンデによって無実の罪が問いただされ辛くも救い出され，そしてめでたく夫婦になる様子が歌われているのである。歴史上，現実には女性のために戦った騎士が神明裁判に敗れた場合，フロワサールの挿話にもある通り，女性は火刑になるものの男性の騎士は首切り役人に引き渡されることになっていたというが（Ernst Schubert: Der Zweikampf. Ein Mittelalterliches Ordal und seine Vergegenwärtigung bei Heinrich von Kleist. In: Kleist-Jahrbuch. 1988/89 Anm.38 S.290），クライストはタッソーの『解放されたエルサレム』におけるクロリンデによる二人の救済の劇的効果に動かされ，彼の物語ではこのように文学的に脚色して２人とも火刑に処せられる設定にしたのだとも考えられる。

しかし，タッソーの長篇叙事詩では，タンクレートとクロリンデの最終的な戦闘場面が長々と歌われるのに対し，クライストの『ペンテジレア』では女主人公とアキレスとの戦闘場面が力強くはあるがきわめて簡潔に描写されており，別の戯曲の『ハイルブロンのケートヒェン』においても，また短編『決闘』においても，戦闘や決闘の描写はやはり短くあっさりしている。叙事詩と戯曲あるいは短編作品というジャンルの相違も勘案した上で比較考量にあたらねば

ならないことは言うまでもないが，クライストの作品ではむしろ戦闘場面そのものよりもむしろその前後の経過の部分に劇的な場面が置かれていることは注意しておくべきだろう。

さて以上のように，クライストの一篇の短編作品に織り込まれた外国文学の色とりどりの精華については，既に多くの研究者によって示されているわけだが，実は私にはもうひとつそこに加えたい作品がある。それはタッソーの生涯において栄光と不幸の揺籃であったフェッラーリ公国の先輩であり，イタリアルネッサンスのもうひとりの大詩人であるアリオスト（1474－1533）の代表作『狂えるオルランド』である。

私がこの作品をクライストの典拠のひとつと考えたきっかけは，福田恆存訳シェークスピア全集第７巻の『から騒ぎ』Much Ado about Nothing に付された訳者の解説によってであるが，そこに紹介されている『狂えるオルランド』の梗概の末尾はおそらくシェークスピアに関する２次文献によっているために誤りを含んでいる（162頁）。当時はアリオスト作品の邦訳がなかったゆえであろう。しかし，2001年に名古屋大学出版会から脇功氏による労作が出版され，ようやく邦語でもイタリア・ルネサンスを代表するこの作品を読むことができるようになった。シェークスピアの『から騒ぎ』については，先に挙げたブライクとハインリヒ・マイアー Heinrich Meyer がリッテガルデの侍女であるロザリエが暗闇の中で女主人のふりをして恋人を欺くモチーフとの関連を論じており（他にもリッテガルデ像の背景については，ブライクがテューリンゲンの聖エリザベト伝説，ヨアヒム・ミュラー Joachim Müller が聖ゲノフェーファ伝説――クライスト以前の文学作品ではシュトルム・ウント・ドラングの作家 Maler Müller: Golo und Genoveva 及び Ludwig Tieck: Leben und Tod der Heiligen Genoveva がある――，最近では多くの研究者が聖マルガレーテの事蹟まで挙げている），その探索の過程で私もこの大作『狂えるオルランド』にさかのぼって読んでみたのである。

この侍女による身代わりのモチーフは『狂えるオルランド』第３版の全46歌のうち第４歌，第５歌，第６歌にまたがる王女ギネヴラ Ginevra のエピソードに現れているが，この作品の最初のドイツ語抄訳（第８歌まで）がマルティン・ヴィーラント Martin Wieland（1733－1813）の「熱烈な弟子であり，崇拝者である」(Karl Goedeke: Grundriss zur Geschichte der Deutschen Dichtung) ヴェルテス F. A. C. Werthes によってベルンで出版されたのは，1778年及び1791年であり，ヴィーラントとの浅からぬ交友を考えればクライストにもこの作品の最初の印象的な部分は，あるいは既知のものだったとも考えられる。しかもその後に，タッソーの『解放されたエルサレム』やカルデロンのドイツ語訳でも名高いグリース Johann Dieterich Gries によって，1804年には第１巻，1805年には第２巻，1807年には第３巻，1808年には第４巻と，クライストの『決闘』成立以前に『狂えるオルランド』の全訳がイェーナで出版されている。グリースは早くからクレメンス・ブレンターノとも知り合いであり，ゲーテ，シラー，ヴィーラント，アウグスト・ヴィルヘルム・シュレーゲル，ノヴァーリスやシェリングとも交友があった。グリースがタッソーの『解放されたエルサレム』の翻訳直後から精魂を傾けたアリオストの『狂えるオルランド』は，こうした当時の錚錚たる作家達の間でもかなり話題になったはずである。そのうえ，このエピソードは『狂えるオルランド』に記された数あるエピソードの中で最初に現れる纏まった物語なのである。グリースの翻訳を基礎として後に編集された本 Ariosts Rasender Roland. Die schönen Episoden des Gedichtes nach der Übersetzung von Johann Diederrich Gries. 1883 などでも，このエピソードはその冒頭に置かれている。その概略はこうである（福田恆存のそれを若干修正しつつ再説する）。

――シャルルマーニュのパラディンの勇士リナルド Rinaldo がスコットランドにやってくる。この国の法律では，不義の噂の立った女は，名誉の証を立て

てくれる騎士が現れぬ限り，死刑の宣告を受けねばならないのだが，たまたま王女のギネヴラ姫がその憂き目にあい，処刑されようとしている。リナルドはその話を森の中の僧院で聞き，姫を救おうとして王の一族が住むサンタンドリア（セント・アンドルーズ）の町に向かい，その途中で姫の侍女ダリンデ Dalinde の危機を救って，その口からギネヴラ無実の証拠を得る。というのは，ダリンデはアルバニー公爵ポリネス Polyness を慕っており，縄梯子をもって公を主人ギネヴラの部屋に引き入れ，逢瀬を楽しんでいた，しかし，ポリネス公はギネヴラと結婚しようとして，ダリンデを使ってその意中を告げようとするが，姫には相思相愛の婚約者アリオダント Ariodant がいて，公の言葉に全く心を動かさぬ，そこでポリネス公はダリンデを巧みに口説き落とし，姫の衣装を着けて自分と逢引の場を演じる事を承知させ，恋敵のアリオダントその弟のルルカン Lurkan に，自分が縄梯子を伝って露台から姫の部屋に忍び込むところを見せてやった，そのためアリオダントは絶望してどこかへ姿を消し，今では崖から海上に身を投げて死んでしまったと思われている，しかし，弟のルルカンがギネヴラ姫を訴えたので，ポリネス公はダリンデの口を封じ，亡き者にしようとしたところを，今，こうして騎士リナルドに助けられたというのである。つまり，アリオダンテと弟のルルカンが露台に目撃したのはギネヴラ姫ではなく，彼女の侍女がその金糸のヴェールと衣装をまとって演じた芝居だったのであり，それを演出したポリネス公は事の露見を恐れ，人を使ってダリンデを殺させようとしたのである。ダリンデを救ってそれを知ったリナルドは，なおさら勇躍，試練に向かってサンタンドリアの町へと道を進める。

サンタンドリアでは，リナルドの到着する前に謎の騎士が現れ，ギネヴラ姫を訴え出たルルカンと決闘が行われ，ポリネス公がその警護の任に当たっていたが，そこにリナルドがやってきて，国王の面前で決闘をやめさせ，ポリネス公の悪事を暴いて彼に戦いを挑む。公はリナルドに討たれ，死ぬ前に罪を懺悔する。謎の騎士は死んだと思われていたアリオダントであり，正体を隠してあ

えて弟に討たれようとしたのだった。大団円で国王はアリオダントに姫をめあわせ，ポリネスの所領であったアルバニーの公爵領を花嫁の婚資として賜る（第６歌15詩行）――

この結末はクライストの『決闘』の結末で，皇帝の面前で兄殺しの罪を懺悔して死ぬヤコプ伯の財産がリッテガルデに婚資として贈られるのと似ているが，双方の相似点はそれにとどまらない。少なくともあとふたつほど，類縁を挙げることができるだろう。

もとよりそのひとつは，侍女が女主人のふりをして愛人を屋敷に引き入れたために女主人の純潔が疑われるという前述の身代わりモチーフである。シェークスピアの三大喜劇のひとつ『から騒ぎ』が類縁作品として挙げられるのは，まさに主としてこのモチーフのゆえである。しかし，シシリー島のメッシーナを舞台としたこのシェークスピア作品では，婚約者同士を離反させるための企ては恋敵によってではなく，アラゴン領主の寵臣である男性婚約者クローディオを貶めるために，その活躍を妬む領主の腹違いの弟ジョンによってなされ，また女性婚約者ヒーローの侍女と恋仲の関係にあるのもジョン自身ではなくて，ジョンの家来ボラチョーである。このボラチョーがヒーローの侍女を女主人に仕立てて逢引しているところを妬み屋のジョンがクローディオに目撃させるのであって，決闘についても喜劇的な脇筋から友人ベネディックによってクローディオに決闘の申し込みがなされるものの，実際に決闘は行われない。悪事をはたらいた家来達が酔っ払ってそれを自慢した話をたまたまメッシーナの夜番が耳にして逮捕，摘発されることで，すべての誤解が明らかとなるのである。ついには逃亡していたジョンも捕らわれ，護送されて町に到着するとの報で，この喜劇は幕となる。ヒーローの無実を証明する者が決闘を行おうとする騎士ではなく，偶然家来たちの話を立ち聞きした滑稽な夜番達であるという皮肉は，シェークスピア独自のものであって，アリオストにもクライストにもそ

うした笑劇ファルス的要素は見られない。『から騒ぎ』との類縁は侍女による取り違い劇にとどまるのである。

『決闘』と『狂えるオルランド』との共通項のもうひとつは，貞操に疑いをかけられた女性がその無実を決闘によって証明してくれる騎士が現れなければ，火刑に処せられるという掟の存在である。この掟を前提として初めてクライストの『決闘』において寡婦のリッテガルデがなぜヤコプと密会しただけで(実際には誤解だが)，家族以外の裁判所によっても罪とされなければならないのか，という作品内部から生ずる疑問にもひとつの解答が与えられるし，また，決闘に敗れたとされたフリードリヒがリッテガルデとともに火刑に処せられようとする物語の展開もそれによって理解されるのである。『狂えるオルランド』では，ギネヴラ姫の窮地を救う決心をするリナルドが，スコットランドに上記の掟があることを知り，次のように言明する。「ただそれがしは，さようなことをしたために，姫君を罰するなどは，もっての他のことにして，さらにまた初めにかかる酷き法，作った者こそ理不尽で，とても正気の沙汰とは言えず，その法がいかに非道か，思いをいたし，思慮を巡らし，新しき掟を作るべきとこそ申し述べよう」(第４歌65詩行，脇功訳59頁)。これに対して，クライストは純潔を証明するために決闘を行うという伏線を継承しつつも，その特殊な掟を前景化するのではなく，真実を明らかにするための神明裁判という法に一般化し，そしてその修正をめぐる顛末を作品化したと言えるであろう。

以上がクライストの『決闘』と多少とも関連すると思われる作品であるが，クライストは果たしてこれらのすべてに通暁していたのであろうか。フロワサールの『年代記』だけでも膨大な書であるが，このことについてシューベルトは次のように論じている。「クライストはフロワサールを当時ブレンターノやサヴィーニやベッティーナ・フォン・アルニムやグリム兄弟と同じように熱心に読んだのに違いない。なぜなら，これほど浩瀚な歴史書から決闘のエピソードを見つけ出すのは決して容易ではなかったはずだからである」(Ernst

Schubert 上掲書 Kleist – Jahrbuch 1988/89 S.286)。しかし，クライストがこのエピソードに出会うために，この歴史書の隅々まで「熱心に」読んだと考える必要はないのではないか。確かにフロワサールの『年代記』は浩瀚で，その歴史記述はフランス，イギリス，スペイン，ポルトガル，アフリカにまで及んでおり，その中でフランスの片隅で起きたほんの小さなエピソードである決闘事件に留意するのは相当に几帳面な読み手であろうが，そうした読み手がクライストの交友関係にひとりでもいて，当時彼らが出入していた文学サロンなどでその知識が披露されたと考えれば，後にクライストが『年代記』でその個所に当たるのはそう難しいことではあるまい。著作全体を知らなくても，その中のエピソードが記憶にとどまれば，作家にとってはそれで十分なのである。

他の作品についても，例えば『狂えるオルランド』では多くのエピソードが場所と時間を隔てて次々と継起するが，その中で『決闘』に関連するギネヴラ姫の物語は前述のように，作品の最初の部分に書かれている。また，『ペルシーレスとシヒスムンダの苦難』の場合も，フランツ・テレミンのドイツ語訳では，これも前述したように，『決闘』に関連すると思われるレナートとエウセビアの物語（第２巻の19章と21章）は原作の前半を扱ったこの訳本の最後の部分に記されている。どちらも膨大な数のエピソードを満載した長篇作品であるが，『決闘』に関する限り，きわめて記憶に残りやすい個所（最初と最後）に該当する挿話が載っているのである。こうした大作におけるエピソードの海の中から直接本人によって，あるいは人を介して間接的に汲み上げられ，煮詰められ，結晶となった短編作品が，クライストの『決闘』なのだと言えるであろう。

ついでに言えば，『狂えるオルランド』にはシャルルマーニュの英雄達がアマゾン女人族の国で戦う話も出てくる（20歌）。その国の掟はペンテジレアの祖先である建国の女王タナイスのものとは若干異なっているが，国の創設者とされる女王オロンテアとその娘であるアレッサンドラとが美しい勇士エルバニオのために新しい掟を作り出す話は，ペンテジレアとその母である女王オトレレが

アキレスに対してひそかに企てた計画を思わせ，しかも，そこには彼女達に反対する仇役として，ペンテジレアの女神官長に相当すると思われる老婆アルテミアまでも登場する。クライストの悲劇『ペンテジレア』に関連する作品も，ギリシア神話のペンテジレア伝説のみならず，この『狂えるオルランド』のもとになった作品も含めて，当時広く読まれていた騎士物語にも求めなければならないのかもしれない。しかし，そのために必要な新たな調査と知見は現在の私の能力を超えている。ここでは，クライストの小さな物語の裾野に広がる関連作品を，現時点で気づいた範囲で報告するにとどめておきたい。

（付記：本稿は，2003年10月18日に東北大学で開催された日本独文学会秋季研究発表会のシンポジウム――クライストの散文作品を読み直す――のために準備した原稿の一部に手を加えたものである）